

古代反律令仏教の

律令仏教への変革に関する推論

加 藤 周 一

釈尊は死して法を残した。聖徳太子も又死して法を残した。然れども人々は法を守らず舍利を守った。太子を囲む人々も又法を守らず、太子の偶像を守った。法は不滅と虚言した釈尊、そして「唯仏是真」と遺した太子、そのいづれもな、古代社会の宗教人に法の影響を残した。人々は聖者と崇め、聖者は「世向虚化」と自己の存続を否定した。最もはげしきは親鸞の「思禿」の思想であろう。生命ある限り法を学び、法に帰依し、法を説いた太子の宗教は、国家の要求と、人々の眞理解の故に変質し、日本における仏法の灯は風前に立ち消えてゆく。私はここにその小さな灯の燃えつきていつた

日本における宗教の歴史は、常に政治権力によつて影響されながら、日本民族の中に解け込んでいつた仏教の歴史であることは、ここにいうまでもないことである。欽明天皇十三年（五三三年、日本書紀記）に始まるこの日本仏教史は、種々の社会情勢の中で常に左右されながら日本民族の姿の中に変形を続け、現代の全く異様な仏教にまで続いている。世界の宗教が大いなる宗教改革をもつように、この日本の宗教も二つの宗教改革をもつ。その第一は、仏教の公伝期から神仏習合の行なわれるころまでにかけて起つたものであり、その第二は、平安末期から鎌倉中期にかけて起つたものである。この宗教改革の時期において、日本の宗教は、特に大きくふくれ、最も盛んな時期

を迎えている。だからこそ、日本仏教史の研究は、これの時期を中心にして、その前後をも含めて、活躍した人々と、その宗教思想をもつて、研究対象とすることゝなできるといつても誤りではないだろう。事実、日本宗教史は、これの時期を中心にしてあるものは華々しく、あるものは、歴史にその名を留め得ない程隠れた存在で、活躍した人々によつて支えられてきた。これは同時に日本の歴史における大きな社会転換の時期にあたり、この時期の宗教及び、その宗教人について考察してゆくことによつてこの転換期の社会史を考察することゝなできる。この第一期宗教改革に偉大な影響を及ぼした人宗教人聖徳太子、その仏教は、何故消滅してしまつたのだろうか。

聖徳太子仏教（以後太子仏教と称す）の衰退について語る前に、太子仏教とその基盤について考えておかなければならない。聖徳太子の活躍した年代は、いうまでもなく推古朝（五九二年）六二八年）五九三年から没する六二二年頃までである。聖徳太子の生年は、五七四年であるから、およそ摂政の位についたころから最も活躍された時と考へてもよいだろう。仏教の伝来は、五五三年であるから太子の活躍した時は、前述した第一期宗教改革の前期にあたる。即ち、太子仏教の存在は、この第一期宗教改革に大きな役割をなしていることになる。

日本の宗教史上にも当然起るべきであつた第一期宗教改革、即ち、觀念的自然宗教から宗教的新興宗教への改革は、不計も仏教という外来宗教によつて成されたわけであるが、この第一期宗教改革について一点大きな疑問を感ずる。それは、仏教という異神の輸入が何故成されたか、何故可能であつたかという

ことである。即ち、仏教の輸入によつて第一期宗教改革が成されたか。日本民族の宗教心は仏教を必要としたのかということである。この点については二つの解答が得られる。その一つは、物質文明の発展にともなう宗教心の発展であり、もう一つは、国家支配体制の確立と発展である。

農耕技術の輸入、鉄器文明の輸入、更に土器文明の発展、輸入は、自然に支配されていた日本民族の立場に、自然を支配する立場に立たせる結果となる。それは、人類の自然に対する向いとして、自然克服の方向に動き出す基盤となる。それに伴う宗教心は、無実態の種々の自然を神として祈り続ける立場（呪術信仰的立場）から、実態のある宗教の必要性へと発展してゆく。即ち、人類の有限の意識から、死後の世界、無限への脱却の欲望をうなみることとなつてくる。更に物質文明が生み出した集団社会は、その経営をめぐつて、権力を生み出し、国家を生み出してくることとなる。この権力は、三世紀に入つて古墳を生み出し、自然神にのみでなく、神格化された人に対する祭祀が存在するようになつてくる。これは、古墳を造り、儀式を行なうという行為をもつて次の族長が、その族長権を自他ともに確認するという重要な意味をもつこととなり生まれてきたものと考へられる。この古墳は、族長権が王権に強化し、更にこの王権が経済力、軍力をもつてゆくと、その威容を増し、副葬品も進歩してくる。ここにおいて古墳は、生前に死後の場の設定をも生み出し、この祭祀は形式化する。六世紀に入ると古墳は、その姿を変え、小規模化すると同時に、副葬品も呪術的なものから、実用的な須恵器や馬具に変化してくる。即ち、古

廣は祭祀の場、神格化された人の墓ではなく、死後の生活の場と変化する。こゝにおいて、その宗教心は、死後に行きあたり、その解明を必要としてくることになる。即ち、才一期宗教改革の必要性、宗教的宗教の必要性が生じるわけである。

古墳は、族長権を自體ともに確認する役割をはたしていたことと、更に古墳は、その権威の象徴として、被支配者に対して君臨してくることとなる。これが、もう一つの解答として得られることである。即ち、国家を支配してゆく上において、いまだ自然を大きく克服していなかつた段階において、経済的、軍事的支配だけをもつては、何時、その権力の場を奪われる結果となるかわからない。そこでもう一つ重要な支配形態である精神支配を確立しなければならなくなる。その精神支配の中心の実態は、即ち古墳である。ところが前述した如く、六世紀に入つて、物質文明のもたらした宗教意識は、精神支配の象徴古墳を、根こそぎ崩してしまふ結果となり、ここにおいて、この精神支配体制を創り出すべき新たな宗教実態が必要となつてくる。

結論するならば、仏教という異神の輸入はこの両面より、日本民族にとつて必要であつたということ、即ち、才一期宗教改革は、日本民族の宗教心が、仏教を必要としていたからこそ、仏教という異神によつて成されることとなつたわけである。

仏教の伝来はこうした人々の宗教心によつて引き入れられることとなつたわけである。その正式の伝来は当時の有力支配者によつて伝来と同時に政治色を帯びてくる、蘇我・物部による

争いがそれである。彼等の争いには政治権力の争奪戦という色が濃厚である。けれども、同時に古代宗教人の意識もそこに含んでゐる。それは、物部によつて「蛭神」と呼ばれ、炭きはつわれ、海に除てられた事実である。仮にも神と呼ばれるものを廃棄するだけのことか、当時の人々の宗教心によつては成し難い事実ではないだろうか。この行為は只単に政治権力争奪の爲だけではなく、まさに「蛭神」に対する「聖神」の意識の表現ではないだろうか。即ち、物部一族にとつては、新たな宗教の否定を唱え、伝統宗教にしまみついてゆくとした。宗教的保守の姿勢をそこにみることゝなる。そして同時に、それは敗れ去るべき運命を背負うことになる。こうして正式に輸入された仏教は、前述した才一期宗教改革の必要性の後半、支配者の精神支配体制の確立には充分に役立つこととなる。但し、それは物質文明におけるものでしかなく、いわば宗教物体の確立でしかなかつたことは書添えるまでもない。正式に仏教による精神支配体制の確立は更に遅れ、才一期宗教改革の終了期である。この他にも正式伝来以前に入り込んだ仏教によつて、極一部の人間に、前者の必要性の充足、宗教心の充足があつたことは充分に予想されるけれども、全体的には、やはり人々の宗教心の充足は、何等成されることはなかつたと解釈するべきであろう。「世間虚仮・唯仏是真」人生無常の思想に懐かれ、仏教哲學的思考により政治を考えていつた一世の学生聖徳太子の仏教は、この古代宗教人の新たな宗教欲望に答えてくれるものであつた。「現実の人間の示す立場の矛盾を知り、それと仏教の立場との矛盾關係を自覺して、主体の転回を實踐しようとする実践

的な思想が、太子の思想の根幹をなしている。「太子の仏教による思想的立場が、蘇我氏に對立し、しかも蘇我氏に理解せられないものであつたことを知り得た。太子の立場にみられる主體的普遍性の把握、人格的、實踐的態度、現實の矛盾と教法の位置づけなどに対すると、蘇我氏的な立場は對外的普遍性に止まり、非人格的、呪術的であり、現實の矛盾と仏教と自己との矛盾を知りぬものとして特徴づけることのできる」(以上二葉憲香先生看、古代仏教思想研究より)この二葉先生の御指摘は、太子仏教の存在意義を明らみながらしている。觀念的自然宗教を脱した人々は、現實の立場の矛盾を自覚し、新たな宗教意識の充足を願つていた。聖徳太子もそのうちの一人である。しかるに輸入された仏教は「對外的普遍性に止まり、非人格的、呪術的」でしみなかつた。即ち、蘇我氏においても、物部氏のそれと同じく、伝統宗教の上に新たな仏教という装飾をつけたに過ぎず、やはり宗教的保守の立場であつたと言ひうる。太子の仏教は、こうした背景の上に成り立つ、太子仏教の具體的な展開は次回にゆずるとして、ここでは、その重要な言葉の解釈だけに止めておきたい。それは、上宮聖德法王帝説所引、天壽國編纂銘文中の「世向虚假、唯仏是真」という言葉である。これは、明らかに現實の無常を感じているものである。そして唯眞なるものは仏であるとする。成唯識論述記に「言世向者、可毀壞故、有對治故、隱眞理……」とあり、唯摩經菩薩品には「如未着即是眞実、眞実者即是仏性」とある。これらの全てから解釈してゆくと、「世向虚假」というのが、現實を否定し、逃避しようとする姿勢と解釈するのは疑ひであり、無常なる

世間を克服する唯一の原理が「仏是真」であると解釈される。即ち、無常態であつた宗教意識を、人間個人の中の仏性に求め、仏道修業による宗教人の克服を提起する。ここにおいてはじめて十七条憲法中の才二条「二曰篤敬三宝。三宝者仏法僧也、則四生之終歸、萬國之極宗。何世何人、非貴是法、人難克思、能教從之。其不歸三宝、何以直枉」の意味が解釈される。こうした宗教的新興宗教の立場、宗教哲學裏れた宗教的、實踐的な立場が、宗教意識として要求された実態である。太子仏教は、故に才一期宗教改革を成しとげる重要な基礎となる。

個人に荷せられた宗教的性格は、国家宗教の姿を生み出さない。即ち、精神支配体制の確立には奇手するどころか、逆に国家的な性格を有する。前述二葉先生は、太子仏教を反律令仏教として規定される。反律令仏教は呪術信仰の上に乘つた觀念的自然宗教を全く否定してしまつた。故に、それは祭司としての支配者、宗教的支配者を否定する。反律令仏教における宗教実態は、個人の自覚識である。反律令的性格を有する仏教は、その時代における社会的状況の上に、宗教的欲望の課題を背負つて度々宗教史上に現われる。しかし、前述したとおり、反律令仏教は、日本における国家体制と国家意識、要に宗教意識の故に、封建国家という権力によつて滅亡か、変質かの運命をたどらなければならぬ。たとえ、それが一時的に権力者も魅了してしまひ、国家再建の爲に利用されようとも、結果的には国家によつて滅亡、変質のうきめをみる。しかもそれらの全ての宗教は自戒の型をもつて変質する。古来より、呪術信仰的性格を

有し、現代尚かつその呪術的性格を脱することのできない日本人の宗教意識は、当然ながら生命の無常を悟り、「仏是眞」の原理の下に常住法身を仏としんとする宗教哲學の理解は容易ではない。太子の仏教は、権力の側につく者でありながら、結果的には衰退し、実質的に崩壊してしまわなければならなくなる。

現在法隆寺西院の本尊となつてゐる釈迦三尊像、その様式は推古天皇十四年（六〇六年）の作である飛鳥仏と類似し、四角な顔、角さも肩の線、左右対称の衣、そして大きな角張つた手をもつ、象徴的、偶像的な仏像である。これは、その技術が輸入されてより、浅日にある日本民族において、日本独特の仏像を造るということが不可能であつたからに過ぎず、輸入の技法がこの二つの仏像を造つたから類似し、象徴的、偶像的であるのだとして誤りではないだろう。法隆寺釈迦三尊像と飛鳥元興寺釈迦像とは、しかし大きさ一点大きな相異をもつてゐる。そしてそれは、飛鳥仏教と班鳩仏教との大きな差異を示している。釈迦三尊像の光背銘文中に「當造釈像尺寸五身」とあるのがそれである。輸入された技術によつて造立された仏像は、その身丈が一丈六尺、所謂丈六であつた。その丈六の身丈を太子と身身にしたという事実が、同じく偶像であるとはいへ、まさに偉大な変革がそこに見出せる。即ち、仏教という異教、異神が、日本の古来宗教と一体となつたところにこの釈迦三尊像が存在していると言える。古墳という祭祀の場を宗教心によりどころとして生み出した人々の意識、所謂入神信仰の意識が、結果的に減びることなくここにもある姿で存在していると言え

る。しかしながら、入神信仰の場合、封建支配権力がそれを生み出し、被支配的立場にある人々に押しつけて宗教的精神統一点を生み出していつたにすぎない。この釈迦三尊像の場合、入神信仰の現われとするよりは、やはり、太子の仏教に帰依した人々の、太子の神格化であり、ただ単なる「入神」の意識ではない。特に、入神信仰としてこれを扱う立場は、権力的な背景やその人々の意識がくみて、要に仏教という宗教の太子的理解の存在から考えてみて、この立場はあきらかに誤りと言わねばならない。即ち、この釈迦三尊像、太子と身身に造られた三尊像においては、まだ太子仏教の理解者の宗教的意識が残つてゐる。ここにおいて、太子は釈尊と同一視され、一部の人々の間に和国の教主、聖徳法王として尊崇されることになる。

釈迦三尊像を本尊としてまつる現法隆寺西院、創建年代に種々の問題を残してはいるけれども、若草寺の存在も又疑う余地を残していない。中門、塔、金堂と並ぶ四天王寺式伽藍をもつ若草寺、そして塔と金堂を並列に建てた法隆寺式伽藍をもつ法隆寺、そしてそのどちらとも関係をもつと考えられる身身釈迦三尊像、しかもこの身身釈迦三尊像には、前述した通り仏教を通じて宗教意識が働いている。法隆寺建立に關する問題、とりわけ、その伽藍様式は、それまでになかつた新たな方式であるだけに多くの異説を生み出す。この法隆寺式伽藍はいまだに大陸において発掘されてゐない。そこで、この様式は日本で生まれたものであるとする。しかし私の友人は「大陸にこの様式のものがある。ただ発掘されてゐないにすぎない」という説を立てた。法隆寺様式の日本誕生説は、そこに種々の意見がある。

その中で、日本人が左右対称を好まなかつたとする説がある。

これは宗教意識から考えて全くナンセンスである。それは、法隆寺様式と建築の面からのみ考え、それを生み出す日本人の古代宗教意識を無視しているからである。もしも新たな伽藍配置を生み出す程の意識があるならば、仏像も、やはり大きく変化しなければならぬし、又、反律令仏教の存在も明確に受け継がなければならぬからである。また、この法隆寺様式は秋葉と太子の並列として生まれたとする説がある。これは一応その的を射ていると思う。しかし、だとするならば、額田廃寺の伽藍と同じく法隆寺様式であり、かつ法隆寺以前のものであると証明された時、この額田寺をいかにして説明できるだろうか。こうして考えていくと、やはり法隆寺様式も大陸に存在し、もしくは大陸において生まれ、それを輸入したものと考えるのが正当ではないだろうか。日本においては新たな伽藍形式は生まれなかつた、それ私の結論である。

若草伽藍は四天王寺式、法隆寺伽藍は法隆寺式、そして等身の三尊像、何故、若草寺かつ法隆寺に移つたのか。ここに法隆寺のもつ宗教的な秘密、即ち、額田寺とは異にした価値がある。釈迦三尊像が宗教史上における一つの改革として等身につくり出された時、それを安置するべき寺についても種々の意見があつたであろう。そしてその寺として、大陸の様式をそのまま受け継ぎなかつても、太子の住居せられた斑鳩宮と平行した住いとしての若草寺を建立せられたと考えられる。これは若草寺発掘の結果、斑鳩宮と同じく磁北に對し北で二十度傾いているという事実から結論づけられる。即ち、若草寺は、大陸の様式を

採用しつゝ、等身釈迦三尊像と聖徳太子の死後の生活の場、住居の設定であり、古墳と意識的に連なりつゝ、全く新たな思想、即ち、太子を生者として安置し、生活せしめた場ではなかつたであろう。故に、大陸の様式を採用しつゝ、も、そこには飛鳥仏教や四天王寺と異つた宗教意識が働いていたのではないだろうか。

同じことは法隆寺においても言える、同じく大陸様式を採用してはなかつた、額田寺とはおそろしく異なるであろう宗教的な意識をそこにもつてゐる。何故、若草寺かつ法隆寺に三尊像が移されねばならなかつたのか、この点についてはいまだに定説を得ていない。しかし、焼失したにせよ、何にせよ、若草寺からの移転を余儀なくせられたことは事実であろう。そのことは、同時に法隆寺の建築様式について考えるべきチャンスを与えてくれたことになる。太子と釈尊との並列はこの時に生まれた。等身に造られた釈迦三尊像に対する帰依は、生者かつ聖者へと太子を昇格せしめていくたものと考えられる。この場合考えなければならぬことは、塔、即ち釈尊の舍利に對する人々の意識である。塔というのはいくまでもなく、釈尊の舍利をおさめた舍利塔 (stupa) であるが、日本においてこの仏舍利信仰が存在した形跡は全くない。故に日本における塔の位置は、空高くそびえるその威容に神秘的な威厳を、礼拝の対象となつたものである。しかも、その礼拝の対象に聖神を、その心中に訓導品を納めるといふ行為が存在する。こうして考えてゆくと法隆寺において並列した塔、礼拝の対象と、仏像、太子とは同列に並び、尊崇されることになつたと言ひうる。

和国の教主聖徳太子の仏教は、日本における最初の本格的仏教として、また同時にそれは反律令仏教として、日本の宗教史に偉大な影響を残しつつも、国家の要求と人々の無理解の政に衰退し、滅び、そして律令仏教への変革を余儀なくされる。太子の死後造立された釈迦三尊像は、太子仏教の滅亡、変革の具體的の一歩である。太子と等身にするこゝによつて、そこに太子を生存さしめ、若草寺という班鳩宮に変わる住居を建立し、太子の不滅を願つた。この時、太子の仏教は、「世間虚仮」の姿をなくし、法に帰依した太子を聖者として、仰ぎ、崇めるといつ古代宗教人の呪術的人神思想と、仏教の変化させられた姿とが一体となつて存在するに致る。そして法隆寺の建立に致つて、ついに太子の仏教は滅び、律令仏教としての大変革は決定付けられる。太子は、等身の釈迦像とされるこゝによつて全く偶像化され、塔と同じく、礼拝の対象として尊崇され、宗教的、主體的宗教の姿が消えて、観念的、客體的宗教の主として変化する。自己の仏性を宗教の実態として説いた太子の仏教は、この時、太子の化身としての偶像が、その実態の役割をはたすことになる。しかし、太子の仏教の影響は大きく、こゝして変様し、生まれた律令仏教は、飛鳥の律令仏教をはじめ、これまでに存在した種々の律令仏教と質的に異なる仏教的、宗教的高度な時限における律令仏教として、神仏習合といふ才一期宗教改革の終末まで、大きな力をもつことになる。太子仏教Ⅱ「反律令仏教」は、この後行基の登上まで、宗教突かり全くその姿を消してしまふ。和国の教主聖徳皇として、法の指導者として明確になるのは、遠く親鸞に致つてからのことである。

釈迦は死してその舍利を残し、太子は死してその偶像を残した。それが古代宗教界であつたが故に……。

(筆者 十三期)